

大手一の門（丸亀城）

丸亀城の北側にある大手一の門は、要塞の最後の防衛線でした。東向きの手二の門を通り過ぎ、2つの門のあいだに直角に配置された柵形を通り抜けてきた攻撃者を減速させ、敵を阻止することを目的としていました。両方の門は、当時に城を支配し、その防御を強化しようとした京極家によって1670年に建てられました。城の入り口はもともと南向きでしたが、京極家は反対側に移動させました。要塞の高い石垣は急襲をすでに非常に難しくしていましたが、対となる門を建設して補完したのです。2つの門は、城の木造の砦とともに、重要文化財に指定されています。

門の屋根の両端には、鬼瓦と鯨が飾られています。前者は邪悪な天使や悪霊を追い払うとされる鬼の憤怒の相を描いた装飾品であり、後者は口から水を噴射することで構造物を火から守ると考えられている魚の形をした彫刻です。訪問者に開放されている2階建ての門の内部は、6つの張出部または床の間が特徴的であり、取り外し可能な床板を備えています。これらの機能は、防御側が下の敵に物体を撃ったり投げたりするのに使うべく設計されました。大手一の門は、太鼓門とも呼ばれます。城主の家臣が門の中で太鼓を叩いて時間を告げていたからです。この慣習は2006年に復活しました。現在は太鼓を使って毎日、大手一の門から正午を知らせています。